

教科等研究会(小学校社会部会)

令和2年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

持続可能な社会の創り手を育てる社会科学習

2 研究経過

第1回			第2回			
期日	人数	場所	期日	人数	場所	授業者
7 / 6	27人	中島小	11 / 20	25人	広安小	右田光一郎

3 研究の概要

(1) 研究の内容

① 研究主題設定の理由

・本研究部会のあゆみ

本研究部会では、学習指導要領をもとに、主体的に調べて考える学習活動及び児童の問いを大切にしたい問題解決的な学習を進めてきた。特に言語活動を大切にしたい学習の取組は、多角的な思考力や判断力、表現力を育成する上で大きな成果をあげてきたと考えている。

今年度もこれまでの取組の成果をふまえ、上益城の県学力調査による傾向と分析、上益城郡教科等研究会の全体テーマも考慮した上で、社会科における言語活動の充実を図りながら、児童が習得した知識や技能をもとに思考・判断し、表現することのできる授業づくりをさらに充実させていきたいと考えた。

また、本研究部会では、「生き方を求め合う」や「未来を育む人間を育てる」などにあるように『人間の生き方に迫る』という点にこだわって教材を開発したり授業展開を考えたりしてきた。人と出会い、その生き方・考え方に触れることは、より教材が身近な問題になるだけでなく、社会科において必要となる概念形成をめざすためにも今後も授業づくりのなかで大切にしていきたい。

・これからの社会科学習に求められるもの

「知識基盤社会（新しい知識、情報、技術が政治、経済、文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会）」と言われる時代がはじまり、とりわけ、旧来のパラダイムの変換を伴うことの多くなる社会では、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断がますます重要であると考えられるようになった。これから求められる「生きる力」とは、社会が日進月歩で変化しつつある中で、社会に主体的に対応し、問題解決に取り組める力であり、それはそのまま求められる人間像でもある。

今年度から、いよいよ新学習指導要領が完全実施となった。新学習指導要領のキーワードは「主体的・対話的で深い学び」の実現であるが、このことは、社会科においては知識・技能を活用することで思考力・表現力等を育成し、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養を目指すものであり、それらは問題解決的な学習による学びの必要性を示唆している。

また、国内外の学力に関する調査結果からも、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に、徐々に改善されつつあるものの、やはり課題が考えられることが明らかとなっている。今後も習得した知識や技能をもとに、活用する力を培うことが、今日的な教育課題である。

② 研究の視点

視点1 「人間の生き方に迫ることのできる教材開発」

上益城郡がこれまでこだわって「学び」にしてきた部分である。学習指導要領のねらいを達成するために、何を学ばせるのか、自分の生き方にどうつなげていくのかを明確にし、地域人

材を活用して人間の生き方に迫る。

社会科は、人間の営みを通して人間の生き方に学び、自らの生き方を考えるという本質を持つ教科である。そのため、授業づくりでは、学習の中で人間の生き方にふれ、何を学ばせるかに重点をおくことが大切となる。

本研究では、ねらいを明確にし、日常生活に密着した内容から入るなどの工夫を行いながら、ゲストティーチャーをはじめ様々な手立てで、人の生き方や考え方を学習したり、人材を活用したりすることが教材の本質につながると考えた。

上益城では、熊本地震において、本県最大級の震災を経験することとなった。そこには、復興や絆を取り戻そうとする人々の姿や、その現実に対応し、問題解決に取り組もうとする人々の姿があった。そこにも、社会科で目指す人間像があった。そこで、本研究では、それらの教材化も重点的に行っていくこととした。

視点2 「主体的・対話的で深い学びを実現する学習活動」

主体的な学びについては、児童が学習課題を把握し、その解決への見通しを持つことが必要である。そのためには、単元などを通じた学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに、学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し、児童の表現を促すようにすることなどが重要である。

対話的な学びとして、実生活で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決していく姿を調べたり、話を聞いたりする活動を設定していく。

これらを踏まえ、深い学びの実現のために、「社会的な見方・考え方（視点や方法）」を用いた考察、構想（選択・判断）や説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追求したり解決したりする活動を行っていく。

視点3 「児童の学びを見取り、確かな力をつける評価」

評価活動では、教師が児童のよい点を励まして学習意欲を高めたり、児童一人一人の学習目標の達成状況をより正確かつ効果的に把握したりすることを大切に、これまでの指導及びその成果を振り返り、今後の指導改善に生かしたり、多様な達成状況の児童に対して個別指導を行ったりする目安とする。

本研究部会では、めざす児童像に即して、児童の発言やノート、振り返りなど、一時間一時間の学習活動の中から、児童の変容を見届けていく。そして、児童一人一人の学習目標の達成状況をより正確かつ効果的に把握していく。

そのために、現実かつ継続的評価が可能となる様々な方法を検証するものとする。また、児童の取組や育ちを刻々と見取り、励ましながら自己評価や自己変容の記録、児童同士による相互評価等を充実させたい。

(2) 成果と課題

【成果】

- コロナ禍の状況の中で、授業研究会も1回のみとなり、さらにビデオ視聴という形をとった。授業者は、自ら各方面に足を運んで情報を収集し、たくさんの情報を持って授業に臨んだ。そのことが導入での児童の意欲の高まりにつながった。授業づくりにも支障があるこのような状況の中で、授業者の先生の主体性や何より授業づくりに向けた熱意が感じられ、情報収集の大切さ、導入の在り方など、全会員で改めて学ぶことができた。
- 試行錯誤しながらではあったが、社会部会で初めて学習構想案を作成することができたことは意義深いものであった。社会科の授業力アップを目指し、郡内に発信していきたい。
- 新学習指導要領のキーワードでもある「主体的・対話的で深い学び」の実現を、本研究部会の研究の視点2に位置づけ、社会科における問題解決的な学習の在り方を研究・実践することができた。
- 事前研究会、授業研究会でも活発な意見交換を行うことができ部会員の学びの場となった。

【課題】

- 新学習指導要領の趣旨や社会科の本質を踏まえた上で、上益城の地域素材・人材を活用した人間の生き方に迫る授業づくりをさらに進めて行く必要がある。また今後も、誰にでもできる（やりたくなる）社会科の授業づくりを目指していきたい。
- 授業研究会の中でも話題となった、資料の精選、資料の活用の仕方（資料からどのようなことを読み取り、何をどのように伝えていくのか）、板書の工夫などについても、更に協議し、よりよい授業づくりを行いたい。

4 実践事例

(1) 授業の概要

単元名 「情報を生かす産業」 (東京書籍 新しい社会 5 年下)

【自評】

- 最初は、まとめとして使うつもりだったが、事前研で、子どもたちに身近な公共施設のため、導入に持ってきたらどうかアドバイスをもらった。導入として、楽しく身近な教材で学べるように授業を構想していったが、子どもたちの意欲も高まった。
- 子どもたちは、バーコードについて知ってはいるが中身を知らないため、そこを詳しく知ってほしいという探究心を引き出したかったが、「情報がすごい」というより「バーコードがすごい」になってしまった気がする。誰がバーコードを使うかにも着目させ、自分たちの生活も便利になっていることにつながっていることも伝えたかった。
- 説明が多くなってしまい、資料を精選し、どこを子どもたちに考えさせて、どこを説明するのかをさらに検討する必要がある。
- 情報の大切さとそれ故の管理の大変さ、を実感させるため、活動の中にクイズを取り入れ、15万冊の話を出せたのはよかった。

【各学年部での協議】

(3・4 年部)

- 指導者がたくさん情報を持っていて、導入がとても工夫されていた。
- 資料がパワーポイントで出てきたのはよかったが、板書に残す工夫が必要だった。
- 資料から分かることをどのように発表させるのか、話し方の徹底が必要だと感じた。
- バーコードなしの本の貸し借りの経験をさせることも面白かったかもしれない。

(5 年部)

- 学習意欲が高まる導入だったし、導入のクイズがまとめにつながっていた。
- 資料が多かったので、精選が必要だと感じた。
- 「持続可能な社会」という点で、フードロスなどうまく貢献している部分を取り出して授業を構想できないかという意見が出た。

(6 年部)

- 導入で教材のよさがあり、社会科の見方・考え方を見つめ直す授業だった。
- 司書の方の動画があるのもっとよかった。
- 子どもたちの言葉で最後はまとめたが、展開で説明が多く、子どもが話したり、考えたりする時間がもう少しあるとよかった。
- バーコードは本当に必要かという課題でも面白かったかもしれない。
- ふり返りシートもよかった。
- バーコードが発達したことによるよさが明確になったところもよかった。
- 授業の準備のために、自ら足を運んで情報を収集されていたのがよかった。

【助言・まとめ(田中部長)】

- バーコードという1つのものに教材をしぼったことが身近で考えやすかったが、バーコードで終わるのではない。そこは入口に過ぎず、スタートではあるがゴールではない。
- 人間の生き方に迫るという点は、本時だけでなく単元を通して考えるべき。単元を終わるときに、情報化社会に生きる私たちの生き方に迫らせたい。
- 最初からバーコードをいきなり出してもよかったかもしれない。
- 板書の仕方の工夫が必要だった。書き方を工夫することで、利便性(使う側)と効率性(管理する側)が板書から見えてくる。
- 司書さんの声だけでも聴かせておくとよかった。
- コンビニのバーコード(質の変化)へとつないでいく工夫が必要。
- 利益を上げる、産業を発展させるための情報も視点として身につけさせていくとよい。
- 情報の便利さも大事だが、情報の怖さも我々は知っておかなければならない。そのことを伝えて行くことで持続可能な社会や人間としての生き方につながるのではないかと。

(2) 学習構想案(要約版)

ア 単元目標

- ① 我が国の情報産業や情報化した社会の様子を調べ、情報産業や情報化した社会と国民生活の関わりについて理解できるようにする。
- ② 様々な情報産業の情報活用の工夫について調べ、情報がそれぞれの産業の中で活用されていることが、私たちの生活の利便性の向上に深くかかわっているということに気づくことができるようにする。

イ 単元終了時の児童の姿(単元のゴールの姿・期待される姿)

様々な産業の情報活用の仕方や工夫から、情報化の進展に伴う専門の発展や、情報技術が、国民生活の利便性の向上と深く関わり合っていることについて自分の考えを持つとする児童。

ウ 単元を通した学習課題

様々な産業でどのように情報を活用しているのかを調べ、情報と私たちの生活の関わりについて考えよう。

エ 本単元で働かせる見方・考え方

情報がコンビニエンスストアや益城町図書館などの場で活用されていることに着目して産業の様子を考えることを通して、情報がそれぞれの産業の中で活用されることによって、新しい技術が開発されたり、人々の生活の課題を解決したりしていることをとらえるようにする。

オ 単元の指導計画(6時間扱い)

	時数	学習活動	評価の観点
1	②本時	○益城町図書館のバーコードにはどんな情報があり、どのように活用しているのかを調べる。 ○コンビニエンスストアのバーコードを調べ、情報の生かし方を予想し学習計画を立てる。	知識・技能
2	③	○コンビニエンスストアで集めた情報をどのように活用しているのかを調べる。 ○大量の情報を活用し、商品開発や発注に役立っていることを知る。 ○コンビニエンスストアの情報技術の活用と他の産業とのつながりを調べる。 ○コンビニエンスストアでは、どのように情報を活用し、産業を発展させているかまとめる。	思・判・表 知識・理解 態度
3	①	○情報活用について、自分たちが取り組むべき課題について考える。	思・判・表

カ 本時の学習

〈目標〉

- ・ 益城町図書館の本についているバーコードには様々な情報が入っており、その情報を活用することで、利用者の本の貸し出しや職員も仕事の質を向上させていることを理解することができる。

〈展開〉

過程	時間	学習活動	指導上の留意事項
導入	5	① 益城町図書館の検索機でクイズを行う。 ② 本時のめあてをつかむ。	○検索機で本の場所が調べられることや本の貸し出しランキングなどが分かることなど、児童が知っていることから入り、それができるのはバーコードがあるからという児童の知らない所を挙げ、児童のバーコードにはどのような秘密があるのかという疑問がでるようにする。
展開	35	◎ 益城町図書館の本についているバーコードには、どんな秘密が隠れているのか調べよう。	
		③ 益城町図書館のバーコードからどのような情報が分かるのか、予想を立てる。 ④ 本のバーコードを読み取った時のパソコンの画面から、どのような情報が分かるのかを調べる。	○学校の図書室の本にもバーコードがあり、そのバーコードには、本の名前や借りた人の名前、学年などが分かることを例に挙げ、利用者カードにはどのような情報が入っているのか予想を立てやすくする。 ○資料を1枚ずつ児童に印刷し、どのような情報が分かるのか調べやすいようにする。 【評価基準】知識・理解-① ワークシート ○資料を使って、バーコードからどのような情報が分かるか調べ、誰にとって必要な情報なのか考えている。
		⑤ バーコードから分かる情報は、誰が必要な情報なのかを考える。 ⑥ 益城町図書館の司書の方の話を聞く。	○バーコードの情報は、働き手にとって必要なものであるということを確認し、「それがなければどうなるか」と発問し、仕事が不便になるということに気づかせ、情報を使うことで仕事の効率が上がり、利便性も向上するという考えられるようにする。 ○利便性が向上するということを考えさせた後、現場の司書の方から、バーコードの活用で仕事の効率が上がったという話をきくことで、情報の利便性についてさらに実感させる。 ○司書の仕事効率が向上することで、利用者側の利便性も向上していることに気づかせる。 ○前回の放送局の授業で情報は受けるイメージから、情報は活用もできるというイメージを持たせる。
終末	5	⑦ まとめ ◎ バーコードにはたくさんの情報があり、活用することで司書の方が便利になり、それによって利用者也図書館を利用しやすくなるという秘密があった。 ⑧ コンビニエンスストアと益城町図書館のバーコードを比べてどっちが情報が多そうか考え、次時につなげる。	○公共機関と産業では、情報の量が違うことに気づかせる。また、産業が大量の情報を益城町図書館のようにどう活用しているのか調べたいという興味を引き立てさせる。